

女子学生の文章表現と性格

— 予備研究としての試論 —

大 西 久 男

目 次

- | | |
|-------------|----------|
| 1. はじめに | 4. 結果と考察 |
| 2. 研究の目的と問題 | 5. 結論と要約 |
| 3. 方法 | ★参考文献 |

1 はじめに

(1) 文章を手がかりとして、その文章を書いた人がどのような過程を経て、その文章なり作品を書いたのか。即ち文章や作品の創作過程の精神は、作者の性格と深い関連をもつものではないかと考えられるのである。

あるひとつの文章が、その筆者の精神、性格と結びつくものとすれば、筆者の性格がその文章に反映していることになる。

そのため、その文章を解明することから、筆者の性格を考えることも可能になろう。

事実こうした努力は、文章心理学の領域において研究されてきているが、わが国においては、この面における研究の歴史は新しく、研究者も意外に少いというのが実情のようである

さて、文章を心理学的な視点から考え、研究する領域は文章心理学であるが、文章心理学は文章の科学である、といわれるように、具体的な

2 女子学生の文章表現と性格

データや合理的な分析が当然要求されるものであろう。

ところで、「文章」を材料とするからには先ず第一に「文章」とは何か、ということをはっきり規定する必要がある。

そこで「文章」とは何か、ということについては、いくつかの考え方がこれまで示されてきた。^(文献1) 日常私たちは「文章」という言葉を特別な意識をもって使うことは、あまりないのではないか。しかしよく考えてみると、いろいろな意味を含んでいるように思ったりする。すぐに考えつくことは、「文」つまりセンテンスと同義語に使うことである。

あるいはまた「文章」という言葉と、「文体」という言葉をほとんど同義語に用いられることもある。

心理学者の波多野完治博士も、著書『文章心理学』（昭和10年刊）では、文章と文体とを大体同じ意味に使っていた。この著書・序文に波多野完治氏は、こう述べておられる。^(文献2)

『此の書は「文章」の現象を、主として第一次大戦後に成立した新しい心理学の光の下に見ようと試みたものである。』と。

これをみると、文章ということ、スタイルと同義語に考えておられたようである。

しかしそれから間もなく、わが国の社会情勢は平穏な時代から遠ざかってしまう。

この状態は学問研究の世界にも影を落していくのである。

この不幸な状態から脱皮した戦後、わが国は新しい文化の華が咲き出したのである。

文章研究の面において、国文学者時枝誠記博士の研究業績が注目された。

時枝誠記氏は「文章」を「文の集合であって、なんらかのまとまりをもった言語表現」と定義し、「文体」を「表現形式の類型」と位置づけられたのである。^(文献3)

このことから、波多野完治氏は「文体」は「類型学」的typological
(文献4)
に考えられた「文章」といえようか。述べておられる。

そして波多野氏は素直に、

『わたしはこの著書の旧版（※筆者註「文章心理学」昭和10年刊）では、文章と文体とを大体同じような意味につかっていた。わたしはスタイルを様式と訳そうと考え、言語にあらわれた様式を文章様式とか、文体とかよぶがよかろう、とおもっていたのである。』

と述べられている。

時枝誠記氏によれば「文章」というものは、個々の人間により形成されるものである以上「一般性」と「個別性」を統一的にそなえていなければならない。という。

波多野完治氏は、時枝理論を極めて論理的で一点の非のうちどころもないという。

だが波多野氏は、時枝理論を高く評価する一方、時枝理論を彼なりの立場から自由に解釈して、自分の考え方を示している。

波多野氏は時枝博士がいうように、「文章」を文の集合と考えるのは正しいと思うが、そこには「価値的見地」ははいてこない。すべての「文章」が平等の顧慮を与えられる。

これに反して「文体」ではどうしても「よい文章」「わるい文章」という見方がはいてこざるを得ないのである。と主張する。

そしてまた、「価値的見地」をいれないという方法論は納得できないこともないが、しかし「文章」の問題では、いずれ「価値」の要素ははいてこざるを得ないのではないかと、波多野完治氏はいう。

先に述べた「よい文章」「わるい文章」にしても、ある時代にはAの文章がよいとされ、また別の時代にはBの文章がよいとされる事実は避けられないし、そうした事実の解明もしなければならぬわけである。

いずれにせよ、文章について考える場合には、その立場をはっきりさ

4 女子学生の文章表現と性格

せなければならぬだろう。

時枝誠記博士の立場、波多野完治博士の立場は、それぞれ自分の研究を推進するための方法論上の問題でもあろう、と考えるのである。

ここで、「文章」について、もう一人の研究者の考え方をとり上げたい。

それは安本美典博士の考え方である。

安本美典氏は、スイスの言語学者ソシュール (Ferdinand de Saussure 1857~1913) の考え方をとりあげている。

ソシュールは、私たちが「ことば」といっているものについて、三つの基本的な用語を用いている。それは「言語活動 (ランガージュ)」、
「言語 (ラング)」、^(文献5)「言 (パロール)」である。

ランガージュは、ひとつの潜勢、ひとつの能力に過ぎず、個人ひとりでは決してラングに達することはないだろう。ラングはすぐれて社会的なものである。

そして、ラングとは、ランガージュ能力の行使を個人に可能にすべく社会が採り入れた、必要な契約の総体である。パロールとは、ラングという社会契約によって自らの能力を実現する個人の行為の謂である。パロールのなかには、社会契約によって容認されたものの実現という、概念がふくまれている。ソシュールは考える。そして、ランガージュは、人類を他の動物から弁別するしるしであり、人間学的な、あるいは社会学的と言ってもよい性格をもつ能力と見做される、というのである。

ソシュールが、ランガージュ、ラング、パロールという三つの概念を得たのは、彼の母国語がフランス語であったことと無関係ではないといわれている。前二者は、英語のlanguage、ドイツ語のSprache に包摂される概念で、パロールの方は英語のspeech、ドイツ語のRede にあたる
^(文献6)概念だからという。

この三つの基本的な用語をわかり易く説明すると、安本美典氏は次の

ような意味として説いている。

即ち「言語活動（ランゲージ）」は一般的な言語活動。「言語（ラング）」は言語活動をおこなう際に用いられる社会習慣の体系で、たとえば日本語とか英語。「言（パロール）」は、ある特定の場所、ある特定の時間において実現される個人の言語表現。をさすというのである。

安本氏はソシユールにならって、「書きことば」についての三つの基本的な用語を設定したいと考えた。

即ちそれは「文章活動」、「ラングとしての文」、「文章」であるという。

この用語について説明すると、「文章活動」というのは、ソシユールの言語活動（ランゲージ）に対応するもので、一般的な文章活動をさす。次の「ラングとしての文」は、文章活動をおこなう際に用いられる社会習慣の体系をさす。たとえば、日本文とか英文。

「文章」はパロールに対応するもので、ある特定の場所、ある特定の時間において実現される個人の文章表現。ということである。

文章心理学は、主としてこのように定義される「文章」の心理学的な研究をする学問であるということになるのである。

さて、「文章」とは何か、という規定のしかたについて、前述したような考え方のあることについて述べてきた。

またこのことに附随したことがらも、数多くあるが、複雑化を避け、それらのことについては別の機会に譲ることとする。

(2) わが国において、文学における文体の変貌がおきてきたのは、昭和の初めころからであろう。それは当時のわが国の社会情勢に起因するといえる。

プロレタリア文学が官憲の手によって弾圧を受け、作家はプロレタリア文学のように、具体的に労働者階級の生活や考え方を文章化することが危険視され、抽象的な方向へ向かわざるを得なかつたろうし、一方では新しい作風——新興芸術派、新感覚派、あるいは心理小説という新

しい文学の領域が生まれて、「文章」に対する関心が作家たちをはじめ、文学に関心を寄せている人たちに大変強くなってきた。

そうした社会環境の中で、「文章心理学」に対する研究者の関心がおこってきたと、いえるかも知れない。

文学での文体の変貌が、文章心理学という研究領域に目が注がれることになったと考えるのである。

さて、わが国において、文章心理学研究の先達は波多野完治博士をその嚆矢として異論はない。もっともこの研究のアイデアは、心理学者城戸幡太郎氏によって与えられたと波多野氏は述べられている(「文章心理学の三十年」)。

波多野氏の『文章心理学』が刊行されたのは1935(昭和10)年、そのあと『文章心理学の問題』、『文章心理学入門』などが刊行されるなどして、波多野氏の研究は着実にその実績を重ねていった。

1960年代に入り、新しい研究者による研究が注目されてきた。それは前にふれたように安本美典博士の諸研究である。統計心理の新しい方法を習得し、文章心理学を古典研究に発展させることを試みるなど、ユニークな研究の業績を発表された。^(文献7)

特に文章の因子分析による研究は、独自の研究方法であり、大いに注目される内容のものである。^(文献8)

こうしてみると、昭和初年ごろから昭和30年ころまでは、文章心理学の研究者は波多野完治氏だけであった。といってもいいくらいの状況にあった。

そのあと、安本美典氏の研究が注目され、少しずつではあるが、文章心理学という研究領域に関心を寄せる者もでてきた。しかし前述のように、歴史も新しく、研究者も意外に少ないのが実態である。

2 研究の目的と問題

(1) さて、本研究のテーマである「女子学生の文章表現と性格」であるが、「文章」についての考え方は前述した通りで、文章表現と性格にどんな関係があるのか、その解明を試みようとしたのが本研究のテーマである。

文章にもいろいろな種類のあることは、よく知られていることで、文章の外形的な面からいうと、簡約体と漫延体とか、乾燥体と華麗体とか(文献9)言われるものがある。

こうした外見だけの分類では、作者の性格を推測することは困難だろう。大切なことはその形がどんな意味のものであるかを考えなければならぬことである。

作家の文学作品を、作者の性格と結びつけて分類するという研究は、これまでもおこなわれている。

一般に、文章というものは、その人の人格がでているものと思われるし、人格を基準にして文章の型を分けることができよう。

この方面での研究では、ドイツのクレッヘルという研究者のものが知られている。

クレッヘルは人間の類型を三つに分類している。「自我連結型」と「物型」と「選択型」で、文章にもこの三つの型があり、「自我連結型」というのは、すべて自分を通して叙述する性格の人で、この型の文章は感情的色彩の強いこと、物を冷静に見ないで何らかの批判的なことを入れて書くのが特徴であるという。

「物型」はこれと反対に、無味乾燥と思われるぐらい、客観的描写に終始する。自分を入れなくて、全く客観的に書くという。

「選択型」は、自我を通して世界を見るのだが、自我のみで表わすのではなく、客観的に妥当する型である。いわば社会化されたやり方で表現するタイプであるという。

8 女子学生の文章表現と性格

日本の作家でいえば、自我連結型では室生犀星の文がその典型であり、物型の作家としては適当な人が見当たらないが、強いて言えば自然主義の作家や徳田秋声の作品には、このような点が多少見えるという。

選択型の作家としては久米正雄の文章がこれに当るとして、波多野完治氏はその例を挙げておられる。

先程述べた簡約体と漫延体とか、乾燥体と華麗体とかいうのも、もっと分かり易く言えば、かざりのない文、かざりのある文、あるいは短い文、長い文とすれば分かり易い。

こういう分類のしかたは、アメリカやイギリスの修辞学で発展していったもので、これらは文章の外形による分類であることは、先に述べた通りである。しかし、この分類のしかたでは先にもふれたが、この文章のもつ意味とか味わいを探ることは容易ではないだろう。

これを考えると、クレッヘルのお考えの方が、文章を作者の性格と結びつけて分類するには納得がいく。

しかし、このようにわれわれが考えることは、文章をすべての人が自分の人格を投入して書けるものだ、という前提条件がないと論は少しも進まないことになる。

文章表現と性格との関係は、文章を書くための修練がかなり上達して、その文章に自分を投入できる段階にならなければ、上述したような類型に分類することは困難である。

これは技術の問題であるかも知れない。文章を普段あまり書かない者が、何かのために文章を書いても、そこに性格が表われるものではないだろう。文章に性格が反映するためには、先にふれたように修練を必要とすることは当然であろう。

これらのことは事実であろう。しかし普段の生活環境が、文章を書くという習慣に割合身近な環境にある者の文章表現の中に、性格なり、その傾向が表われるのではないかと考えたのである。ことに女子学生はこ

うした環境に身を置くものと考えれば、文章表現と性格との関係が、ある程度は推測されるのではないかと思うわけである。

(2) ところで「文章」を題材とする文章心理学にかかわることを研究しようとする場合、どうしても文章心理学のこれまでの流れについて振り返ることが必要である。

かつては、文章が文学作品を批判鑑賞したりする場合の規範となったのは修辞学であった。修辞学は文学的表現技法の学問で、ギリシャのアリストテレスにはじまるという。

もともとは弁論の方法についての学問であった。しかし、文章は個人を表現するものでなければならない、という考え方が起こり、文章を書く規範とした修辞学は次第に輝きを失っていく。そして、それまでの修辞学にかかわる文章の科学について、作家や批評家、哲学者たちによって論議されていった。

やがてスペンサー (Spencer, Herbert. 1820~1903) は、レトリック (Rhetoric) を文章の規範とするよりも、ある表現がなぜ効果をもつのかを、心理学的に解明しようとし、連合心理学 (association psychology) の立場からすすめたのである。

スペンサーは連合心理学派に属するから当然であったろう。

当時は連合心理学からヴント (Wundt, Wilhelm, 1832~1920) らの構成心理学 (structural psychology) の時代で、ヴントが活躍していた時代であった。

わが国においても明治期、大正期に刊行された多くの修辞学書は、文書の修辞を心理学的に説明する場合には、連合心理学の原理にたよることが多かったという。^(文献10)

心理学の分野は、やがてヴントの心理学の批判としてゲシュタルト心理学 (Gestalt psychology) があらわれ、文章の研究においても、新しい考え方が芽ばえてくる。それに呼応するように昭和の初期、わが国では

前述したように国語学者の時枝誠記氏、言語学者の小林英夫氏、心理学では波多野完治氏らがでて文章研究に大きく貢献する。

ことに小林英夫氏の文体論の重点は、作品のモチーフは作家の文芸理念から発せられるものであり、それはまた作家の世界観のあらわれで(文献11)あり、その世界観を形成するのは作家の性格であるというのである。

また小林氏は作家の個人的な創造の世界へにも目をむけ、統計的方法によって客観的な分析にも力を入れたのである。

そして波多野完治氏は、小林英夫氏と同様に個人の創造の世界に注目する。昭和10年『文章心理学』を世に問い、文章研究のひとつの方向を決定したといえる。

波多野氏は作家の作品を分析するという、新しい分析方法を開拓し、文章構造を統計的、分析的に研究し、実証する方法で推進したのである。

小林英夫氏も、文章を読んでその印象の相違から、観念的性格の文章とか、即物的性格の文章というように名づけている。

これは小林氏の言う「文体印象」から区別する考え方であるが、波多野氏は印象が異なるからには、文章の構造も違うはずである。

構造を分析的に調べて、これが明らかになってはじめて、文章と性格との関係をつかむことができるのではないかと考え、実証的にこれに手をつけていったのである。

そこで波多野氏は、志賀直哉と谷崎潤一郎の作品をとりあげ、二人の文章の構造上の相違を統計的に、分析的に調べた。

深田久弥氏が、二作家の特徴を割合によくあらわしているものとして挙げている志賀直哉の「山形」、谷崎潤一郎の「蘆刈」の中にあるものを取りあげ、両方とも百字足らずの文章であるが、この二つの文章の相違を検討した(紙数の都合で作品の掲載を割愛)。

「蘆刈」の方は全体が86字で、それが一つの文章になっているが、「山形」の方は全体が81字で、53字と28字という二つの文章になっている。

つまり潤一郎の文章は、直哉の文章と比較して非常に長いと言えるわけである。

文章中に使われた句読点、品詞別（名詞、動詞、形容詞および副詞、代名詞的）の数を調べた。第1表がそれである。

谷 崎 潤一郎（蘆刈）		
名 詞	男山 絵 背中 木々 繁み びろうど つや 夕ばえ 色 中空	11
動 詞	ある して した 含み 残って いる 黒ずみ わたって いた	9
形容詞 副 詞	(絵にある)ような まんまるな (びろうどの)ような 暗く 濃く あたかも まだ どこやらに	8
志 賀 直 哉（山形）		
名 詞	木 山 辺 沢 溪流 幾つ 青葉 夏 光 水 上 苔 岩石 上 がく 花	16
動 詞	繁った 言っ ている あり いた 透し た 踊っ いた 被り 咲き乱れて	10
形容詞 副 詞	美しい 小さな 深い 美しく	4

第1表 「蘆刈」と「山形」の品詞別
(波多野「文章心理入門」より)

谷崎潤一郎のは複雑であり、志賀直哉の文章は短い文章が重なり合っていて、またわかり易く、簡単な構文といえよう。

第1表からもわかるように、志賀直哉の文章は谷崎潤一郎の文章よりも短いのに名詞が多く使われているし、構文については先に述べた通りである。作品の原文を掲載できなかったのも、理解に困難さを伴うのは、大変残念であるが、この点をご寛容の程をお願いしたいと思うのである。

両氏の他の作品についても、波多野氏は分析を試みている。谷崎潤一郎の「金と銀」、志賀直哉の「雨蛙」である。構造上両者の相違は、前述したのと同じ傾向にあったこともわかった。

このほか、センテンスの長さ、名詞の音節の長さなども比較されたのである。

このように、二人の作家の文章の形態上の相違を安本美典氏は**第2表**のようにまとめられているが、両者の相違が一見して理解されるだろう。

	谷 崎 潤一郎	志 賀 直 哉
文の長さ	長 い	みじかい
句 読 点	一センテンスのなかに多い	すくない
品 詞	動詞が多い	名詞が多い
文の種類	複文が多い	重文が多い
修 飾 句	形容的修飾句が多い	修飾句がすくない

第2表 谷崎潤一郎と志賀直哉の文章の相違
(安本美典「文章心理学入門」より)

長い文と短い文のもつ心理学的意義は、何であるのか。かつての修辞学でも、「短い文章は簡単で直截であるが、その代わりややもすれば唐突でけいれん的になり易く、長い文章はリズムと抑揚を得ることに適し、かつ場景を完全に描写しつくすことができる」(波多野「文章心理学入門」P88)などと言われていたが、重要なことは、長短のどちらの文章を好むのかは、ニュアンスをどのように表現しようとするのか、できるものであると思う。

観念的性格と即物的性格に関係があるのは、文の長さより、文の長さの変化であって、長短をどのようにまぜて叙述をするのかということである。

文の長さの変化というのは、文章の平均字数と、各個の文のそれからの差(脱逸)をみると容易にわかる。

文の長さに変化のない作家は、この差(平均錯差)があまりないだろう。また長い文、短い文をいろいろまぜる人の平均錯差は多いことになる。

波多野完治氏は「金と銀」、「雨蛙」について計算した結果、平均字数49.2字と32.1字、平均錯差17.6と17.2であったと述べられている。

(3) ところで、精神医学的な面から文章の長短が人の性格と深い関係があるのではないか、ということに関心を寄せている研究者もいる。

精神医学者の泰井俊三氏は、精神分裂病患者の一少女の文体の分析をした結果、その一文中の平均字数は20.1字で、日本文の平均字数（30～40字）に較べて非常に短く、芥川龍之介の晩年の文章の平均字数と一致（文献12）することを見いだした。

精神医学の方からすれば、芥川龍之介は性格類型学的には分裂性性格であると言われている。

また泰井氏は、躁うつ病患者の文体の分析もおこない、ある患者から文章の平均字数80.7字という数をだしている。

谷崎潤一郎の「蘆刈」や「春琴抄」あたりでは85.6字が平均になっている（谷崎潤一郎は性格類型学的には、躁うつ性性格であると言われている）。

泰井氏の分析からみると、分裂病や分裂性性格の人の文章は短く、躁うつ病や躁うつ性性格の文章は一般に長いと考えられる。

ただ泰井氏の分析した患者の症例数が不明なので、断定するには患者数の不明が気になるところであるが、傾向としては理解されよう。

この傾向は、波多野完治氏がおこなった志賀直哉（性格類型学的には分裂性性格）と、谷崎潤一郎の文章構造の分析と同じ傾向である。

文章構造の分析によって、性格特性を知るためには、これまでも述べたように、文の長さ、句読点、品詞の種類や使用度数などを統計的に分析したり、あるいはまた動詞と名詞の比、形容詞と動詞の比（これを活動指数とよぶ）を調べることによって、情緒的安定度を調べるなどの方法がある。

あるいはまた、文章完成法テストも、書かれた文章の内容を分析することで、書いた人の性格を判断することもおこなわれている。

波多野完治氏は、谷崎潤一郎と志賀直哉の文章を比較して、前者は動

詞などの使用度が多い「用言型」の文章。後者は名詞を多く使う「体言型」の文章であると指摘する。

この「用言型」と「体言型」の文章は、〈社会への方向〉と〈事物への方向〉という心的な基本方向のひとつの表われとみることができると推定している。

安本美典氏は、この用言型、体言型の文章について、次のように説明をしている。

「用言型の文章は、ほぼ共通して抒情的であり、詩的であった。そこでは、対象を客観的に描写することよりも、作者が対象をどうとらえたか、どう感じたかの表白のほうに力点がおかれている。

これに対して、体言型の文章では、対象そのものが重みをもつ。叙事的であり、やや論理的である。ときには、学問的な観察や分析の記述に近い印象を与えることさえある。

用言型の文章が、主観にかたむくとすれば、体言型の文章は客観にかたむくといえるだろう。(原文のまま)」(安本「文章心理学入門」P223)ということである。

波多野完治氏の研究が、文章に関心をもつ文学者、哲学者、精神医学者、心理学者らに大きい影響を与えることになった。

そののち心理学者安本美典氏は、新しい統計学の方法で文体现象にせまった。

氏は文章の性格を研究する方法として、因子分析法を活用した。文章の性格研究において説明的因子分析の立場にたち、文章の特徴を示すものとされるものを、すべて特性として集め、その中から15の特性を選びだし、文章の性格特性としたのである。そしてそれを調査すればよいことになる。**第3表**がその項目である。

(1) 直喩の出現度	(6) 句点(マル)の数	(11) 過去止
(2) 声喩の出現度	(7) 読点(テン)の数	(12) 現在止
(3) 色彩語の出現度	(8) 漢字の使用度	(13) 不定止
(4) センテンスの長さ	(9) 名詞の使用度	(14) 名詞の長さ
(5) 会話文の量	(10) 人格語の使用度	(15) 動詞の長さ

第3表 調査する15の項目

(安本美典「文章心理学入門」より)

氏はまた、説明的因子分析の立場にたってはじめて、文章の性格学と深いつながりをもつことができると考えた。

15の特性間の相関関係を探り、その相関がある因子によって数学的にうまく説明できても、それだけでは不十分である。もっと根元的に作者の精神過程にまでさかのぼらなければならない。それは説明的因子分析の立場にたつことで、手がかりを得ることができると考えた。

説明的因子分析の立場というのは、人間の性格特性を表面的な特性と源泉的な特性に分けるように、文章の性格でも表面的なものは、たとえば「センテンスの長さ」「直喩の使用度」などであるが、源泉的なものは因子分析によって明らかにされ、表面的な特性の間の相関を規定するものだと考えたのである。

このような安本氏の研究方法は、文章の科学としての文章心理学の発展に、大きな示唆を与えるとともに、大きく貢献するものである。安本氏が選びだした15の特性は、文章を調査する場合、この15の項目それぞれの数量を調査するわけで、調査をするときの項目でもある。氏は調査の方法について詳細に記録し、日本の作家100名の作品について、15の項目にしたがって調査し、文章特性間の相関係数も算出するなど、精力的におこなわれたその実績は大変なものである。

さて、本研究の目的も女子学生の文章と性格についての関連を探ることである。

波多野氏がおこなった研究調査のやり方、あるいは安本氏が選びだした15の文章特性などによってなされた方法などによって、女子学生の文章表現が、性格と何らかの関連があるのかどうかを、調査研究しようとするもので、先ず予備研究としてすすめていくものである。

そして、本研究の目的が妥当なものであるかどうかを、確認しなければならない。

そのために、文章構造の分析の結果を検証しなければならない。

その検証の方法のひとつとして、構造分析の結果をその個人の他の検査の結果と比較検討してみることにする。

他の検査として「YG性格検査」および「内田クレペリン精神検査」の結果とを比較してみることにする。

今回はこの段階でとめ、次の段階として考えていることは、分析結果の各項目間の相関はどうか。

また分析の結果と、他の二つの検査との相関は果してあるのかどうか、などを検討していく予定である。

3 方法

(1) 調査対象者

北海道武蔵女子短期大学学生、2年生専門ゼミナールA・Bの二つのグループの40名を調査対象とした。

(2) 資料

ア 学生に「私の性格」という題で文章を書かせたものを、研究素材とした。ただし今回は予備研究として、そのなかから無作為に4名の文章をとりだし、それを調査対象とした。

イ 4名それぞれの「YG性格検査」および「内面クレペリン精神検査」を比較検証のための資料とした。

なお、4名の文章はそれぞれ620字～640字程度の分量で、文章の提示

は紙副の都合で、1名だけの文章を参考に提示することにして次に掲げた。他の3名は割愛する。

また4名の対象者を、A、B、C、Dとした。

私の性格

A 子

友人達から私について言わせると、ほとんどの人が口をそろえて「クール」だと言う。「冷たい」のとは少し違うらしく、要するに「冷静」という意味のようだ。自分では普段そうは思わない。

けれど周囲の人々があわてればあわてるほど冷静になる時は少ない。

自分の事に関してはズボラな割に、対人関係はやや神経質になりがちだ。

小学校、中学校、高校時代からなどの友人で親しい人達などはそれほど気を使わないが、比較的新しい友人、特に年上の人などには気を使う。この人にはこういうことを言っては傷つくとか、この人にこういう言葉使いをしたら失礼じゃないだろうかなどとってしまうのだ。

もちろん、そういう人達と話をしても楽しいし、冗談を言ったりもする。

ただ、話をする時に一瞬考えてしまうということなのだ。

会社訪問などに行くと必ずといってよいほど書かされる自分の性格についての欄で、絶対に書く私の長所は「立ち直りが早い」という七文字だ。

アルバイト先の人に一度、「お前はダイヤモンドの神経をしている」と言われたことがある。どんな事にも傷つかないという意味なのだが、別に傷つかない訳でもないし落ち込まない訳でもない。

ただ単に立ち直る時間が普通の人よりも早いのだ。と、自分では思っている。

誰も信じてくれないが。

私の性格は時と場合によって好きになる時と嫌いになる時がある。

現在その割合は前者が四で後者が六だが、この割合が五対五まで持って行けたら、もっと視野が広がるのではないだろうかと思っている。

(原文のまま)

(3) 調査項目

4名(A, B, C, D)の文章は、次の3項目について調査した。

調査項目：①名詞の使用度 ②動詞の使用度 ③センテンスの長さ

(注・前述したように文章の性格特性として考えられるものに、安本氏が挙げた項目や、あるいは波多野氏の「体言型」、「用言型」の文章という考え方などを勘案して、「名詞の使用度」、「動詞の使用度」、「センテンスの長さ」の3点について調査することにした。予備研究として、今後の研究方法を考えるために、調査の項目を最少限にとどめることとした。)

4 結果と考察

4名の女子学生(A, B, C, D)の文章の調査結果は、**第4表**に示す通りであった。

	名詞の使用度	動詞の使用度	センテンス の 数	平均字数 (センテンスの長さ)	平均錯差
A	58	38	16	40	8.75
B	47	36	16	38.7	7.75
C	34	38	11	56.3	6.45
D	48	51	18	35.5	3.8

第4表 4名の調査結果

第4表について少し説明を加えると、文章がいくつのセンテンスでできているか、その数をかぞえ、文章の総字数をセンテンスの数で割れば、センテンスの長さ、つまり平均字数がでてくるわけであるから、その文章が長いセンテンスでできているか、短いセンテンスでできているかがわかる。

また平均錯差も示した。文の長さの変化ということも重要であると思う。

文章の平均字数を、それぞれのセンテンスのそれからの差（脱逸）の平均値が平均錯差で、長さに変化のないのは、平均錯差がほとんどないだろうし、長短とりまぜて書かれた文章は、平均錯差が多いことになる。

さて、第4表に示した調査結果をみてみよう。

(1) 4名の名詞と動詞の使用度をみると、名詞の使用度が動詞のそれと比較して大きいのは、Aが最も大きく、Bが次いで大きいAほどの差はない。あとの2名はそれ程の差はない。AとBの共通点は、センテンスの数と平均字数においてもみられるし、センテンスの数は両者とも同じなので、当然平均字数もほとんど同じになる。

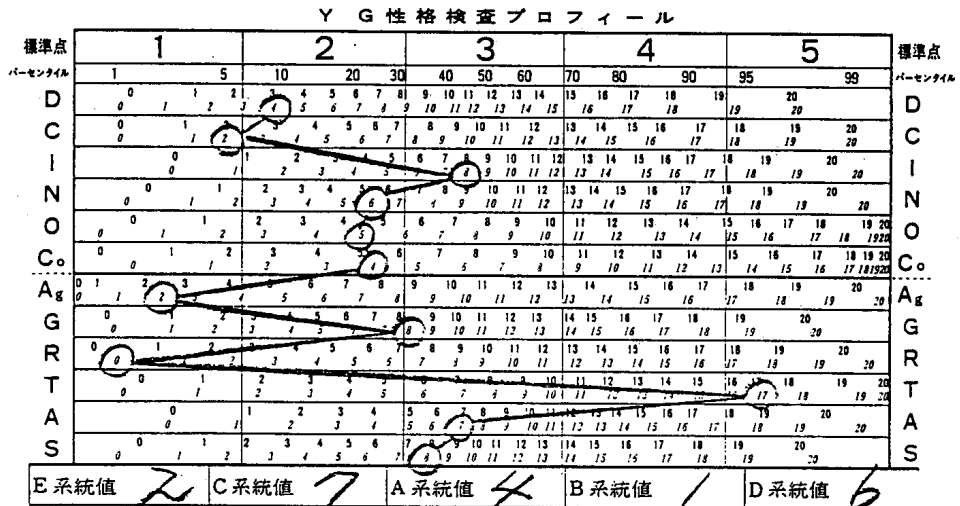
前者の2名は、波多野氏の説にしたがえば「体言型」になるのだろう。

(2) 「体言型」の文章は、「事実への方向」という心的な基本方向のひとつの現われとみることができ、対象そのものが重みをもち、叙事的でや

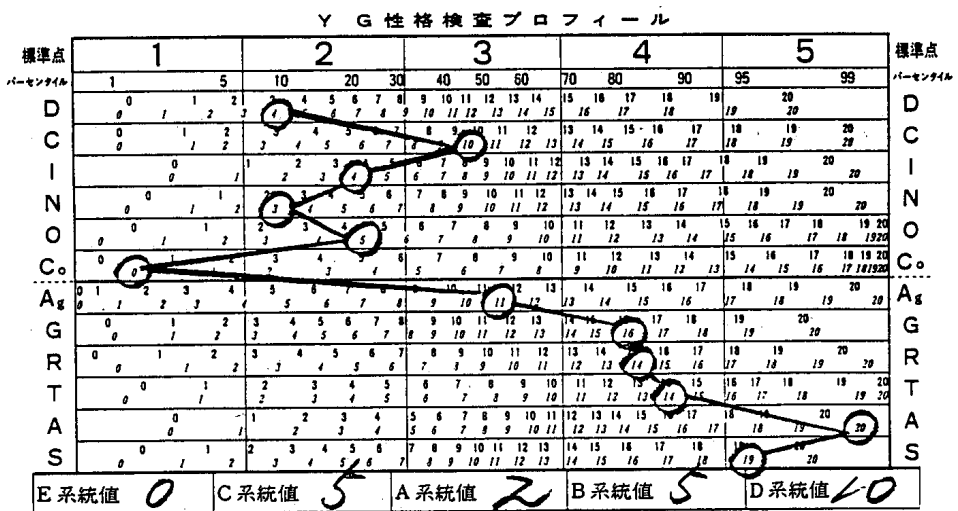
や論理的である，という考えに従うなら，「文章の即物的性格と観念的性
格との対立」（小林秀雄）という文体印象の面からいっても，「即物的性
格」に区分されよう。

即物的性格の文章は，われわれの心を直接ものに向けさせ，もののニ
ューアンスを直接われわれに印象させると言われているが，果してA，
B両者の性格傾向が体言型の性格傾向と言われるのと似ているのか。

両者の「YG性格検査」と「内田クレペリン精神検査」の結果を提示
して比較してみる。

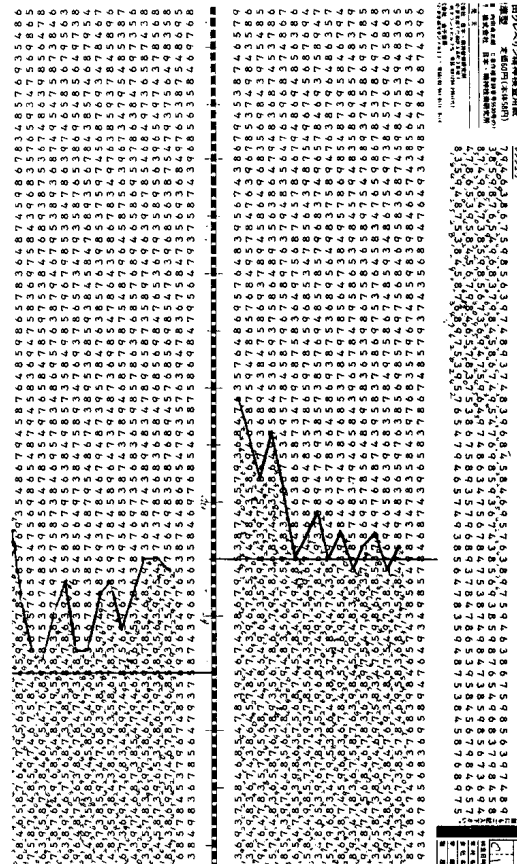
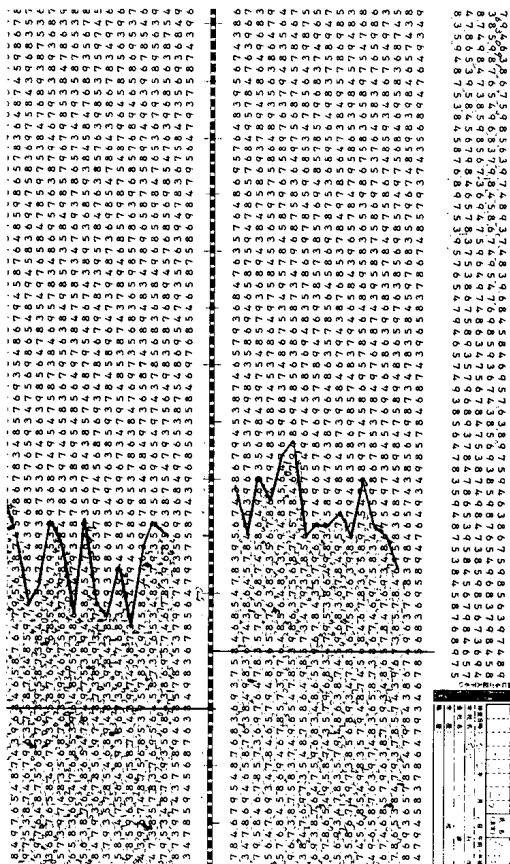


第5表 AのYG検査プロフィール



a'f
 AV 54.90
 R 109.01
 pfi 8.5

(a'f)
 AV 65.13
 R 112.16
 pfi 4.1



第7表 Aの「内田クレペリン」

第8表 Bの「内田クレペリン」

(※ AV全平均作業量, R後期増減率, pfiプロフィール得点)

(3) ア, Aについて

上掲の表から考えられることは、AのYG性格検査のプロフィールは「C型」で、いわゆる安定適応消極型と言われるタイプで、Calm Type（鎮静型）と名付けられている型である。安定消極型で消極的内向性で、問題をおこさないタイプだと考えられている。

前述したように名詞の使用度の多い文章は体言型だというのは、心的基本方向のひとつの現われとみることができるなら、体言型はユング

(Jung, C. G. 1875~1961) の内向型に結びつくものと考えられる。Aの文章構造の分析による性格傾向は、Y G性格検査の結果と共通するものと思われる。

また内田クレペリン精神検査の結果をみると、曲線類型判定は「a'f」と判定される。

この曲線から考えられるのは、Aの特徴として、まじめであるが、気のりが遅く、取りかかりに手間どる傾向があるようである。

内向型の特性である。

結論から言うと、Aの文章構造の分析を通して考えられた性格の傾向と、Y G検査および内田クレペリン検査の結果とが共通した傾向の結果を得ることができたと考えられる。

イ、Bについて

Bの文章構造分析をみると、名詞の使用度は動詞よりも多少大きい、Aほどの違いはない。センテンスの長さもAと相似しているといっていだろう。

BのY G検査のプロフィールは「D型」である。この型は情緒的に安定し、活動的積極的外向性で、心理的な表現で言えば、安定積極型である。

内田クレペリンをみると、曲線類型判定では「(a'f)」と判定される。特徴をいうと、落ち着いたタイプであるが、多少気重さもうかがわれる。しかし外向的なタイプである。

Y G検査のプロフィールの結果と内田クレペリンは共通した特性傾向がみられる。

しかし、文章構造の分析からみると、Y Gと内田クレペリンの結果が示す特性傾向とは離れているように思えるのである。

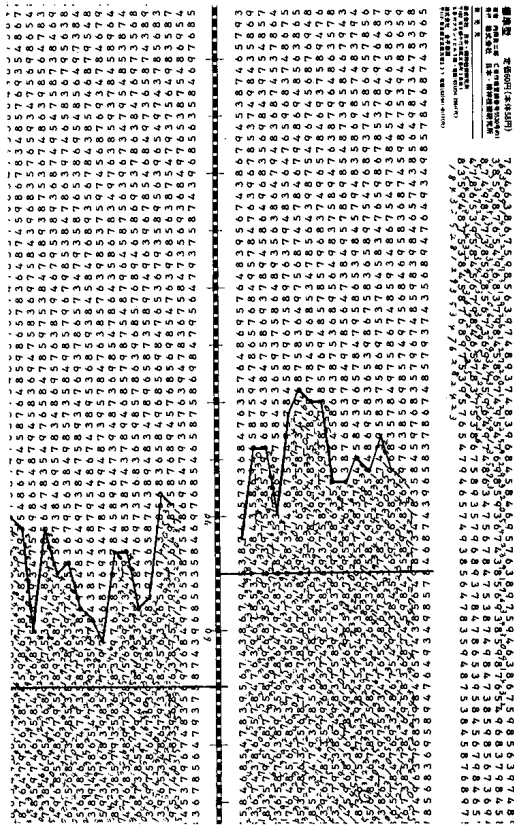
構造分析の上からみると、中庸をいくタイプと考えられるのだが、Bについてはもっと探究の必要がある。

(a'f)

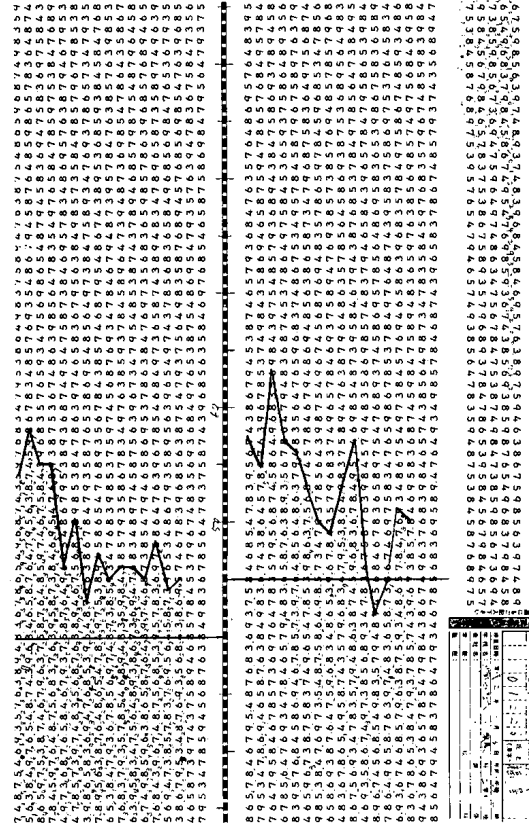
AV 70
R 114.9
pfi 10.8

a'f

AV 50
R 107.8
pfi 13.5



第11表 Cの「内田クレペリン」



第12表 Dの「内田クレペリン」

CとDの文章構造の結果(第4表)をみると、両者の名詞と動詞の使用度は、それほどの違いはないが、両者で目につくのは、センテンスの数の差である。Cは11でDは18のセンテンスで文章を構成している。

したがって、センテンスの長さはCが56.3, Dが35.5で、平均錯差も6.5と3.8で少ない錯差である。

平均錯差が少ないというのは、自己の思考リズムが一定していることである。そういう時に文章を書くとそのようになると考えられるわけである。

ところで、CとDの「YG検査」のプロフィール(第9表・第10表)

をみると、2人とも「AB型」である。2人のプロフィールの内容をみると、Cは一見、引込み思案のところがありながら、やる気を起すとまじめにとり組むというタイプである。

Cの「内田クレペリン」(第11表)をみると、調子が出るのに手間どるタイプであるが、大変まじめで、粘り強いところがうかがわれる。

また後期作業量(R)からも、気のりに手間どる面がはっきりでている。

Cの文章構造からでも、思考のリズムが一定しているということは先にふれたが、落ち着いた気持で物ごとに対処する性格傾向である。それはYG検査や内田クレペリン検査の結果からも考えられると言える。

Dについてはどうか。DもCと同様にYG検査は「AB型」である。しかし、その中身はCと多少異っている点がある。

それは精神的な面では割合に神経質であるが、外向的な性格傾向のようである。

文章構造の分析から平均錯差が少ないことは先にふれた通りだが、Cの文章は観念的性格の文章のように感じたが、言葉のニュアンスに注意して書いていると感じたのである。

平均錯差の小さい理由は、その文体の観念的性格に基づくものであることは明らかである(波多野「文章心理学入門」)と言われているが、Dの場合、正確に言ってこのことに当てはまるものかどうか、未確定的と言わざるを得ない。他の面からも検討の必要があると考えている。

内田クレペリンの判定結果からは、割に現実的で、こだわりのないタイプと思われるのであるが、この点はYG検査のプロフィールと共通した面を予想できる。

しかし文章構造分析との共通面が何となく不明確なのである。

5 結論と要約

(1) 今回、予備研究としたのは、文章表現が個人の性格と、どのように関わりがあるのか、あるいは全く関係がないものか。何かを探りたい気持ちで手をつけたわけで、研究方法を将来的にどうしたらよいのか、などのことを考え、予備研究として先ず手をつけたのが、その理由である。

(2) 結果的に、4名の女子学生のうち2名（AとC）が、文章構造分析の結果と、検証するための「YG性格検査」および「内田クレペリン精神検査」と共通した性格傾向を表わしていることがわかった。

あとの2名（BとD）については、YGと内田クレペリンとの間には、共通したものが表われているが、文章構造分析の結果と共通した性格傾向を見出すことに困難さを感じた。

(3) 今回はその傾向を探ることで止めたものの、今後の問題は、

①文章構造分析の結果と、YG検査並びに内田クレペリンとの相関を確かめ、その妥当性を探ること。

②文章（対象者に書いてもらう文章）の「主題」やテーマを決定する際、何を主題なりテーマとすべきかは、充分検討すること。

これは作者の性格が投入できるか、あるいはできないかということに結びつくと思われるからである。

すると今回与えたテーマ「私の性格」というのは、果して妥当なものであったかどうか、検討してみることも必要になってくる。

③文章の性格特性を表わすものについて、今回は3項目についてだけ調査したが、今後は他の項目についても調査の必要大きいと考えるべきである。

④調査対象者の文章数をもっと多くすることが望ましい。

要約……。①文章表現と性格には関係あることが予測されるか。この研究がテーマであるが、文章構造の分析を通して、女子学生の文章表現と

性格に相関が認められることが、今回の段階では充分とは言えないが、可能であることがわかった。②文章構造分析が示す性格傾向を検証するために、今回はY G検査と内田クレペリンを使ったが他の検査をも使用するのがよいと思われた。③被験者となる対象者に与える文章のテーマは、作者の人格が投影できるようなテーマを選定することが、大変重要であろう。④予備研究としてとり組んだ本研究の目的とする点では、ある程度の資料を得ることができたし、また改正すべき研究方法の方向づけも知ることができた。

参考文献

- (1) 安本美典著「文章心理学入門」 誠信書房 (1965) P 3～30
- (2) 波多野完治著「文章心理学」 三省堂 (1935) P 1～4
- (3) 時枝誠記著「文章研究序説」 山田書院 (1960) P 14～17
- (4) 波多野完治著「文章心理学<新稿>」 文章心理学大系1 大日本図書 (1965) P 62～68
- (5) Ferdinand de Saussure「Cours de Linguistique Generale」, 小林英夫訳「一般言語学講義」 岩波書店 (1940) P 19～34
- (6) 丸山圭三郎著「ソシュールを読む」 岩波セミナーブックス2 岩波書店 (1983) P 111～116
- (7) 安本美典著「文章心理学の新領域」 誠信書房 (1966) P 77～114
- (8) 安本美典・本多正久共著「因子分析法」 現代数学レクチャーズD-2 培風館 (1981) P 167～194
- (9) 波多野完治著「文章心理学入門」 小学館 (1988) P 76～82
- (10) 文献1と同書 P 32～33
- (11) 小林英夫著「文体論の建設」 育英書院 (1943)
- (12) 入谷敏男著「ことばの心理学」 中央公論社 (1965) P 95～96